

令和五年度 入学試験 第一回 国語

令和五年二月十日

京華女子高等学校

□ 漢字に関する以下の問いに答えなさい。

問一 ①～⑥の——線部のカタカナをそれぞれ正確な漢字に直しなさい。

- ① 施設費をイジ^ジする。 ② オン^ンを仇^{あだ}で返す。 ③ カモツ^ツ列車が見える。
④ 魚のランカク^クが目立つ。 ⑤ コフン^ンをめぐる^ることが趣味だ。 ⑥ タブレット機器のアツカ^カい方。

問二 ①～⑥の——線部の漢字の読みをそれぞれひらがなで答えなさい。

- ① 護衛^{エイ}をしっかりとりする必要がある。 ② 彼の悪事^{アクジ}を密告^{ヒツコク}する。 ③ 高級な反物^{ハンモノ}を輸出する。
④ 彼は着ている衣^イを脱ぎ捨てた。 ⑤ 彼の位^イは高い。 ⑥ 意志薄弱^{イシハク}などところがある。

□ 次の【文章Ⅰ】を読んで後の問題に答えなさい。

【文章Ⅰ】

口頭報告のツールはここ数十年のうちに技術的に進歩しました。今やパワポなき講義は講義に^{注1}あらず、と言ってもよいくらいです。理系では授業のAV化は早くから進んでいますし、文系でも例外ではありません。わたしが東大を退職した二〇一一年当時、周辺の文学部教員に聞き込みをした限りでは、授業にパワポを使う教員がおよそ半数。使わない教員は少数になりました。わたしは講演にパワポを使っています。今やパワポなしでは講演できなくなっていますが、それにしても^①パワポには功罪共にある、と思わないわけにいきません。

映像の伝達力は偉大です。音声だけを便りにメッセージを聴衆に伝えようとするより、音声を文字変換したり、黒板に書くはずだったモデルを図示したり、統計数値を図表化したり、そこに動画や音声加われば、強力なメッセージが伝わります。まだパワポがなかった頃。授業には統計や図表、引用などを切り貼りしてコピーし、配付資料を作っていました。^{注2} a OHP(オーバ―ヘッドプロジェクター)が登場し、スライドがやがてパワポになりました。そして今では動画やアニメーション、音声もとりこめるようになっていきます。

ですが、代わりに登場したのがパワポ依存です。パワポにあることは^{ちくいち}逐一その順番で話さないとならないようになりましたし、反対にパワポにないことは話しくくなりました。b パワポの時系列に縛られて、臨機応変に話の流れを変えることもむずかしくなりました。その効果は、パワポに書いてあるように、次の話を、話し手自身が予想するようになったことです。

限られた時間資源をきっちり使つてムダのないスピーチをするためなら、完全原稿を事前に準備しておいて、それを読み上げる、というスタイルがいちばん完璧でしょう。OHPやパワポでその方式を採用するひともいます。完全原稿を文字情報として画面にアップしておいて、それを読み上げるといやり方です。外国語で講演するときなどには、こういう読み上げスタイルがしばしば採用されます。最近では障害者の情報保障に要約筆記という同時的な文字起こしがあります。c 決定的な違いは、事前に準備した読み上げ原稿の場合は、文字をほぼ同時に提供するという点では同じかもしれない。d 決定的な違いは、事前に準備した読み上げ原稿の場合は、話し手も聞き手も、次が予想できるということです。そしてコミュニケーションにおいてこの予想ほど、関心を削ぐものはありません。

大阪大学のコミュニケーションデザインセンターで演劇を通じてのコミュニケーション論を教えていた平田オリザさんが『下り坂をそろそろと下る』[平田2016]のなかで卓抜なコミュニケーション論を展開していました。発話に人が惹きつけられるのはなぜか？ 一瞬の淀みや詰まりに、聞き手は予想を空白にして向かいあわなければならなくなるからだ、と(正確には覚えていませんが、^{がいりやく}概略)このような趣旨の内容でした。ですから「X」のような「雄弁」は、実は雄弁とは言えないのです。

数年前にマイケル・サンデル教授の「ハーバード白熱教室」が話題を呼んだことがありました。わたしも番組を見ましたが、驚いたのはかれがパワポを一切使っていなかったこと。聴衆との「対話」という学問の原点ともいうべきやりとりのなかで、彼はメッセージを伝えていました。長時間の授業は長さを感じさせず、聴衆は前のめりになって耳を傾けていました。教室は緊張感にあふれていました。d ……次に何が出てくるか、誰にも予想できなかったからです。

そうか、パワポがなくてもこんな授業ができるんだ。わたしはサンデル教授に学ぼうと深くうなずいたものです。

パワポが進化すると、見るも華麗な操作でアニメーションや音声を取り入れたプレゼンをする学生も登場します。ですが、そういうプレゼンに限って、なんだかだまされたような気がするものです。あれよあれよと話が進んだが、ほんとにそうだったのかな、と。^②

AV媒体が進化すれば、何も口頭のプレゼンなどという注3ロウテクな手段を使わなくても二〇分のVTRを編集して見せたらよきようなものです。最近の若い講演者のなかには、かねて用意のプロモーショントビデオを、そのまま会場で放映するひともいます。

e 編集された映像コンテンツはよくできていますが、^③そのたびにわたしは「もったいないなあ」と感じます。せつかくその場に本人がいるのに、その本人の肉声が聞こえてこないなんて、と。

最強のコミュニケーション・ツールは、何といてもメッセージの送り手の身体的な現前性 presence です。その時・その場を共有するというライブ感と対面性が、コミュニケーションの原点中の原点です。プレゼンとは、まことにわたし自身のプレゼンであるのです。

そして口頭報告は、そのコミュニケーションの一形式にはかなりません。研究会やゼミが重要なのは、そのライブ感と対面性があるからです。そのような場では、口頭報告は準備した以上のメッセージを伝えてしまいますし、聴衆は予期せぬ反応で応じます。いつもというわけではありませんが、わたしがライブの講演を好きなのは、あれれ、わたし、こんなことまで言っちゃってるう、^{注4}という「K点」を越えるような発言を、その場が引き出すことがあるからです。話しながら、そうか、そうだったのか、と自分で気づいたり、なるほどこれとこれとはこうつながっていたのか、と腑に落ちたり。役者が同じ台本で芝居をしながら、客席とそのつど一回性の一体感を味わうときの高揚感に似ているかもしれません。

【ア】講義や講演では自分があらかじめ知っている以上のことはめったに得られません、質疑応答では、予期せぬやりとりがもたらされます。

【イ】ですから、どんなにコミュニケーションテクノロジーが発達したとしても、放送大学やeラーニングは、ライブの授業やセミナーに完全に置き換わることはないだろう、というのがわたしの確信です。

【ウ】それだけでなく、わたしは講義や講演よりも質疑応答の時間のほうがずっと好きです。

【エ】もちろん聴衆の反応のなかには、前章で述べた内在的コメントと外在的コメントの区別のように、応えるべき問いと応じる必要のない問いがあります。

【オ】大学の少人数のゼミナール形式は、昔も今も、もつともぜいたくで豊かな教育環境というべきでしょう。

神ならぬ身に、すべての問いに答えなければならないという責任を引き受ける必要はありませんから、愚にもつかない質問はスルーすればよいのです。

スルーの仕方にも芸があります。いちばん簡単なのは、問いには問いで返すこと。

「そうおっしゃるあなたご自身のお考えはいかがですか？」
こんな芸もあります。

「マルクスは、問いはその問いを立てた者によってもつともよく考え抜かれている、と言いました。今の問いは、あなたご自身もつともよく考えておられるでしょう。わたしに聞くよりご自身で答えてみてください」

「介護保険はこれからどうなるんですか？」といった八つ当たりのような質問には、「今の質問はわたしではなく、政府に言うてください」と答えればいいのだし。

ですが、^{注6}肺腑に響くボディプロウのような指摘や、^④急所を突く直球のような質問には、^⑤真摯に向き合います。そこにはあなた自身のホンネや、成長のタネが仕込まれているかもしれません。

講演の場ではありませんが、忘れがたい記憶があります。「いのちの授業」を実践していた高校教師、故山田泉さん[2007]と対面したときのことです。再発ガンで末期を宣告されていた山田さんは、痛み止めを打ちながらわたしに会いにきてくれました。その時彼女は、数カ月先の講演を引き受けるかどうかで迷っていました。先方に迷惑をかけるかもしれないし、とためらいを見せる彼女に、初対面のわたしは、「引き受けたら」とすすめ、次のようなことばを口走っていました。「生きるのに、遠慮はいらないわよ」……そしてそれを口にした自分に、びっくりしました。待ったなしの、後のない一回性のライブの現場で、わたしは自分の肺腑からことばを絞り出していたのです。

そうか、そうだったのか、わたしはこれが言いたかったのよ……ことばはそのような場に、ライブで生成します。それは話し手にも聞き手にも、**Y** を超えるものをもたらします。

コミュニケーションとは賭けだ、と言ったひとがいます。差し出したものを相手を受け取るかどうかはわからない。差し出したものは違うものを受け取るかもしれない。差し出した以上のものを、受け取ってもらえるかもしれない。足場のない未来にそのつど踏み出すという行為がコミュニケーションなら、発話はその基本の「き」ですし、そのために貴重な時間資源を与えられると

いうプレゼンの機会を活用しない手はありません。そしてその口頭報告の一回性と対面性を通じて、はっとした気づきが生まれ、あなたの研究はヴァージョンアップしていきます。多くの著作に、対話やコメントを交わした同僚や聴衆への謝辞しゃじが書かれているのはそのためです。

(上野千鶴子『情報生産者になる』による)

注

- 1 パワポ……マイクロソフトオフィス・パワーポイントの略。米国マイクロソフト社が開発・販売するプレゼンテーションソフト。
- 2 OHP……光源とレンズミラーを組み合わせることで、資料を離れた大型のスクリーンに拡大して映す視覚機器。一九六〇年代に授業用として全国の学校に普及した。
- 3 ロウテク……ローテクノロジーの略。単純で初歩的な技術。
- 4 K点……スキージャンプ競技でそれ以上飛ぶと危険な極限点のこと。
- 5 eラーニング……エレクトロニックラーニングの略。コンピューターを利用した教育や学習。
- 6 肺腑……肺。肺臓。心の奥底。心底。

問一 【ア】と【オ】は文章の順序が違っています。論理的に正しい順序に並べ換えて、記号で答えなさい。ただし、【ウ】は三番目にくるものとします。

問二 a と e に入れるのに最適な語を、それぞれ次のア～カの中から一つずつ選び、記号で答えなさい。ただし、同一の語を二度以上用いないこととします。

- | | | | | | | | |
|---|------|---|------|---|------|---|------|
| ア | たとえば | イ | ですが | ウ | それから | エ | つまり |
| オ | また | カ | なぜなら | キ | ところで | ク | たしかに |

問三 ——線部①「パワポには功罪共にある」とありますが、その説明として最適なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア パワポを使つての口頭報告は、発話者の音声を伝えられるだけでなく、話の流れが変化したとしてもその変化に応じて文字や図表などを提示することができるものの、パワポに書いてある内容以外は話しにくくなってしまったということ。
- イ パワポを使つての口頭報告は、発話者の音声を伝えられるだけでなく、文字や図表を使い分かりやすく、かつ時系列順に話すことができる一方、図表や資料を話し手が多用するようになってしまったということ。
- ウ パワポを使つての口頭報告は、発話者の音声を伝えられるだけでなく、文字や図表を使い、より聞き手にメッセージを届けることができる一方、パワポに書いてあることに沿った内容以外は話しにくくなり、話し手も聞き手も話す内容を予期できるようになってしまったということ。
- エ パワポを使つての口頭報告は、文字や図表を使うことでより話し手のメッセージを伝えることができるようになったが、パワポに書かれたことに話し手が縛られるようになったため、スピーチの完全原稿を事前に準備しておいて、それを読み上げるようにした方が伝わりやすくなるということ。
- オ パワポを使つての口頭報告は文字や図表を使うことで、より話し手のメッセージを伝えることができるようになったが、障害者の情報保障が考慮されない形でパワポが作られることが多いので、文字情報を中心としたパワポ作りをする必要があるということ。

問四 X に入れるのに最適な語を、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | | |
|---|------|---|---------|---|------|---|-------|---|-------|
| ア | ぬかに釘 | イ | のれんに腕押し | ウ | 寝耳に水 | エ | 立て板に水 | オ | 焼け石に水 |
|---|------|---|---------|---|------|---|-------|---|-------|

問五 ——線部②「そういうプレゼン」とは、具体的にどのようなプレゼンですか。本文中より三十字以内で抜き出して答えなさい。ただし、句読点・カギカッコなどの符号を含む場合は一字と数えます。

問六 — 線部③「そのたびにわたしは『もったいないなあ』と感じます」とありますが、その理由として最適なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア プロモーションビデオなどの映像コンテンツはよくできてきているが、本人の口頭報告がないため、メッセージの送り手の身体性や口頭のプレゼンに伴うライブ感、対面性を感じられないから。

イ プロモーションビデオなどの映像コンテンツはよくできてきているが、プロモーションビデオだけでは伝わりづらい本人の熱意や人柄を感じることができないから。

ウ プロモーションビデオなどの映像コンテンツはよくできてきているが、口頭報告などのロウテクな手段を使うことで、より伝わりやすいプレゼンになるはずだから。

エ プロモーションビデオなどの映像コンテンツだと何度も再生することが可能だと聞き手が感じるため、口頭報告を主にしたプレゼンの方が、一回性の一体感を感じることができるようになるから。

オ プロモーションビデオなどの映像コンテンツだと一つのメッセージしか伝えることができないが、口頭報告を取り入れた方が準備した以上のメッセージを聴衆に伝えることができるから。

問七 — 線部④「急所を突く直球のような質問には、真摯に向き合しましょう」について、次の(1)と(2)の問いに答えなさい。

(1)「急所を突く直球のような質問」と対照的な質問を本文中から九字で抜き出さない。ただし、句読点・カギカッコなどの符号を含む場合は一字と数えます。

(2)「急所を突く直球のような質問には、真摯に向き合しましょう」とありますが、それはなぜですか。本文中の語句を用いて説明しなさい。

問八 Yに入れるのに最適な語を、本文中から二字で抜き出さない。

問九 けいこさんは、【文章I】で書かれた「コミュニケーション」についての記述をノートにまとめることにしました。〈ノート〉の Aに入る最適な語を、本文中から十六字で抜き出さない。ただし、句読点・カギカッコなどの符号を含む場合は一字と数えます。

〈ノート〉

【文章I】

その時その場を共有するというライブ感と対面性が、コミュニケーションの原点中の原点だ。

←

プレゼンなどの口頭報告はこちらが準備した以上のメッセージを伝えるし、聞き手の予期せぬ反応を生む。

● コミュニケーション Ⅱ A という行為と言えるかもしれない。

↓ 自分が準備したものの以上のメッセージを相手が受け取る場合もある。

(正しく受け取る場合もあるし、間違って受け取る場合もある。)

問十 次の会話は、けいこさん、はなこさんが本文の読後感を話し合ったものです。傍線部A～Dの中に本文に書かれた内容と合致しないものがあります。傍線部A～Dの中から合致しないものを一つ選び、記号で答えなさい。

けいこ：授業の中でパワポを使う機会が増えてきたよね。この前パワポを使って発表する授業があったよ。パワポは音声だけなく、図や表なども示せてより強いメッセージを伝えることができるから、分かりやすい発表になったよ。

はなこ：上手く発表できて良かったね。本文に書いてあったけど、パワポなどでの口頭報告もコミュニケーションの一形式であるというところが印象に残ったかな。けいこさんの発表でも発表を聞く人が色々な反応してくれたから上手く発表できたのかもしれないね。

けいこ：そうね。発表していて聞き手側が「うんうん」と頷^{うなず}いてくれたり反応をしてくれたりしたから、話していて気持ちが楽になったの。用意していた話以外のことも伝えられて、ライブ感と対面性がある場では、こちらが準備した以上のメッセージを伝えることがあるのだと実感することもできたわ。

はなこ：この文章でもライブ講演など口頭報告の場面ではいつも、準備した以上のメッセージを伝えてしまうということが書かれていたよね。これから高校生になって、発表やディスカッションの機会も増えると思うの。だから高校生になる前にコミュニケーションの方法やコツなどについての本を読んでおきたいな。

けいこ：そうね。コミュニケーション能力などとよく言われるけど、コミュニケーションについてはあらゆる場面で考えていかなといけないテーマだよ。今のうちから色々な意見や考え方に触れておきたいな。

はなこ：わたしはもう少しコミュニケーションについて調べてみようかな。図書室に行っていくつか本を読んでみるわ。

問十一 【文章Ⅰ】を読んだはなこさんは、「コミュニケーション」について調べ学習をすることにしました。以下に示す【文章Ⅱ】は、はなこさんが調べ学習で調べた文章です。これらを読んで、(1)・(2)の問いに答えなさい。

【文章Ⅱ】

コミュニケーションは言語メッセージだけを使って行われるのではなく、非言語メッセージも多く用いられる。しかし、私たちは普段、自分の話し方―声の張り具合や高低の幅など―をどの程度意識しているだろうか？ 声の大きさや話す速度までを意識したとしても、それ以外のことを意識するよりは話す内容に気を取られることが多いだろう。それでも(中略)聞き手側は話し手の話し方から多くのメッセージを受け取る。別の例として、貧乏ゆすりを考えよう。している本人は癖になって自分が貧乏ゆすりをしていることにさえ気づいていない場合もある。一方、私たちは貧乏ゆすりをしている人を見ると、「あの人はイライラしているのだろう」と感じることが多い。

これらの例は、私たちは無意識のうちにもコミュニケーションをしてしまっていることを示している。このことを整理すると、表1-2のようになる。即^{すなわ}ち、コミュニケーションとは必ずしも相手に何かを伝えようとする意図がなくても成立するものなのである(コミュニケーションの無意図性)。また一方で、私たちはこちらが相手に向けて何かを伝えようとしても伝わらない場合といるものもある。例えば相手が遠くにいてこちらの声が聞こえなかったり、ものすごく何かに集中してこちらの呼びかけに答えなかったりすることはさほど珍しくないだろう。このような場合でも、こちらが相手に何か伝えようと思ってシンボル^注を操作した場合は、その行為はコミュニケーションであると考える。さらに、相手がこちらの伝えようとしたことを誤解した形でメッセージを受け取ってしまった場合でも、メッセージが受信されたからにはそこでコミュニケーションは成立したとみなされる。相手に誤解なく伝わった場合のみがコミュニケーションではないのだ。

表1-2 コミュニケーションの成立

	メッセージが受信された場合	メッセージが受信されなかった場合
メッセージを送信する意図があった場合	《ア》成功したコミュニケーション (相手がこちらの意図通りに理解しても、誤解しても、コミュニケーションは成立している)	《イ》失敗したコミュニケーション (相手がこちらのメッセージを受け取れなくても、コミュニケーションは成立している)
メッセージを送信する意図がなかった場合	《ウ》無意図的コミュニケーション (こちらが相手に何か伝える意図がなくても、相手がメッセージを受け取ってしまったら、コミュニケーションは成立している)	《エ》コミュニケーション不成立 (こちらが相手に何も伝える意図がなく、相手もこちらからメッセージを受け取らなかった場合は、その言動はコミュニケーションにはならない)

注 シンボル……感情や思考を他人に伝えるために用いる言語や身ぶり、物のこと。
(滝浦真人・大橋理枝『日本語とコミュニケーション』による。なお、横書きの文章を縦書きに変更した)

(1) 【文章Ⅰ】の……線部「差し出したものとは違うものを受け取る」というのは、【文章Ⅱ】の表1―2の《ア》《エ》のどれにあたりますか。最も適当なものを選び、記号で答えなさい。

(2) 次の①～③の例は、【文章Ⅱ】の表1―2の《ア》《エ》のどれにあたりますか。最も適当なものをそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- ① 考え事をしていてだまっていたはなこさんを見て、怒っていると感じたけいこさんはその部屋から退出した。
- ② はなこさんが、授業の発表で口頭報告をしているのに、かずこさんはイヤホンをして一切話を聞いていなかった。
- ③ はなこさんの家庭菜園を見たかずこさんが、「はなこさんの花は綺麗ね」と言ったのを、はなこさんは「はなこさんの鼻は綺麗ね」だと思ってしまった。

【解答】

問一 イ ↓ オ ↓ ウ ↓ ア ↓ エ

問二 a ウ b オ c イ d カ e ク

問三 ウ

問四 エ

問五 見るも華麗な操作でアニメーションや音声を取り入れたプレゼン

問六 ア

問七 (1) 愚にもつかない質問 (九字)

(2) 質問に向き合うことで、自分のホンネに気づいたり、成長のタネを見つけたりすることがあるかもしれないから。

問八 予期 (九字)

問九 足場のない未来にそのつど踏み出す (という行為) (十六字)

問十 D

問十一

(i) ア (誤解しても、コミュニケーションは成立している。)

(ii) ① ウ ② イ ③ ア